

# 経済性を追求する産業的農業の「非経済的な意味」

——ネギの生産に特化した農業法人経営者の語りから

野口 憲一

(日本大学文理学部若手特別研究員)

本稿の目的は、経済性の追求を前提とした産業的農業の持つ「非経済的な意味」を明らかにすることである。このことについて、他業種における7つのグループ企業の代表取締役を全て辞任して、山形県においてネギの生産を中心とする農業法人を立ち上げた経営者の語りについての解釈を行った。従来、農業の近代化に対しては、環境社会学、農村社会学や民俗学などの諸分野において批判的な見地からの研究が数多くなされている。農業にとっての近代化は、農業者の主体性や自律性を奪う大きな要因として描かれてきたのである。一方で、近代化とは一線を画した農業については、様々な「非経済的な意味」が取り上げられ、肯定的に描かれてきた。以上に対して本稿では、近代化を経た産業的農業であっても、相対的には必ずしも確立されつくした産業なのではなく、大幅な主体性の余地を担保している産業であることを明らかにした。さらに、作物を生産するという作業には、経営の延長線上にあるチャレンジを許容する無限大の余地を含んでいることを論じた。以上から、産業的農業を営む農業法人経営者にとっての「非経済的な意味」は、経済性を担保しながらも、なおかつ無限大に広がるチャレンジの余地であると結論づけた。

## 目次

- I はじめに
- II 事例の概要について
- III 7つの企業の会社経営者を辞して就農する
- IV ネギに対する思い
- V 産業的農業の「非経済的な意味」
- VI おわりに

## I はじめに

- 1 農業にとっての「近代化」の位置づけ  
——先行研究の検討から

農業に向けられる一般的な言葉として、「農業は近代化を促進させることで労働環境を改善させ、売り上げを向上させる必要がある」というのがある。これは農業に限らず、近代化が遅れてい

る産業、あるいは職業に向けられる極めて一般的で常識的な見解だと考えられる。例えば、雇用労働者はできる限り給与・労働条件の良い企業に就職したいと考えるであろうし、経営者は売り上げを上げる一方、経営の合理化を進めて利益率を向上させ、なおかつ給与を中心として労働条件を改善することで、できる限り優秀な従業員を雇用し、さらに高い利益を得ようとするはずだからである。まったくもって当然のことであろう。

しかし、農業を対象とする社会学諸領域（農村社会学や環境社会学）や民俗学においては、農業の近代化を促進させ、経済性を担保しようという見解が批判的に捉えられている。それでは、このような領域において、農業にとっての「近代化」、そしてそれを達成した果てにある経済性は、どのような存在として捉えられているのだろうか。このことについて、まず農業にとっての「近代化」

に関する先行研究からみていく。

農業にとっての「近代化」については、「機械化・化学化・装置化と、大規模化・専門化・単作化（連作化）」（大野 2004:48）、あるいは「工業化」（榊潟 2002:7）というような表現がなされている。そして、近代化を経た農業は、国家的な政策に基づき「各地域の行政・農業協同組合が各農家を『指導』」することで大量生産・大量販売が奨励され、「種や苗、農薬、除草剤、化学肥料、工作機械を購入して伝統的農業から近代農法」への転換が求められることで、「生産した農作物を『商品化』」して、「集荷物を農協へ出荷し販売すること、経営形態を零細自営から大規模化・法人化すること」（榊潟 2002:8）が求められたという。そして、食と農は市場経済の論理に巻き込まれることにより、「生業としての“農”から産業としての『農業』」（徳野 2011:340）になったという。すなわち、経済性を追求する産業としての農業へと変化したわけである。

この結果として起こったことは、「『指導』に頼る農業になりやすく、農民の営農への主体性や積極性が減退しやす」（徳野 2001:124）になったというのである。さらに「百姓自身が田畑と直接かかわり合う時間」が減ることで、「百姓が自らの生身の体をもって自然と向き合うことによって得られる、農業の『面白さ』『楽しさ』」が減少することで「つまらなく」なってしまった（船戸 2004:140）とされている。結果として、近代化を経た農業は「大量生産・大量消費を志向する特殊な生産力主義」としての「フォーディズム農業」化し、「農業者の労働時間と労働強度の増大」「労働の専門化と単純化」「生産と生産物の品質における技術的・経済的ノルムの標準化（＝農業者の自律性の喪失）」（池上 2001:56-59）をもたらしてしまったというのである。以上のように、先行研究の中では、農業にとって近代化があくまでも否定的に位置づけられていることが分かる。

一方で、近代化とは一線を画した農業については、環境負荷が少なく生産者と消費者の提携を通して引き離された食と農業との間を再考する有機農業運動論（榊潟 2008）を中心に、新しい農本主義（宇根 2014）や生活農業論（徳野 2011）が提唱

されたり、農業の持つ自然環境や景観の保全、地域文化の継承（安室・古家・石垣 2009）などの生産性や経済性とは異なる方向における農業の機能や意味が肯定的に論じられたり、農業の中の遊び的な側面が強調（藤村 2008）されたりしてきた。これらの研究では、農業と「農」とが異なるものとして捉えられる。近代的な技術を導入することで産業化された経済活動を指す農業に対して、「農とは、経済活動としての農業だけを意味せず、土を媒介とした人と自然との多様なかかわりを示すもの」（安室 2008:127）であるという。近代化を経た産業的な農業が批判的にとらえられる一方で、これらとは一線を画する農業（＝「農」）の「非経済的な意味」が積極的に見出され、肯定的に位置づけられているのである。

もちろん、これらの研究が農業の近代化に批判的であり、これとは異なる農業のあり方を模索することには理由がある。それは、これらの視点が主に、1970年代以降の減反政策による稲作の生産調整、農薬被害や農薬における環境汚染など、かつての農業基本法が目指した農業の近代化によって発生した様々な弊害や矛盾に対する批判的な視座として提示され始めた視点だからである。さらに、そのような近代化の結果として、現状としての農業が高度に産業化された高収益産業になっているわけでもない。むしろ、例えば国家的な政策の中にある稲は、徹底的に研究がなされ、技術革新も突出しており、近代化が進展しているが、一方では、生産性を飛躍的に向上させることで米価が下落し続け、同時に高度な科学技術への依存を高めることで、設備投資の必要性をエンドレスに増大化させ続けている。

結果的に稲は、国家的な関与をもってしても、単に生産するだけでは圧倒的に儲からない作物となっている。さらに稲作についての生産技術までもが、大企業や一部の専門家に独占され、技術革新についての農業者のアクセシビリティが遮断されてしまっているのである。このことから、農業の近代化を批判的に扱う研究群は、農業の意義を、近代化や経済性とは異なるところに戦略的に見出そうとするのである。このような傾向は、「百姓の生は経済行為が成り立っているから価値がある

のではなく、在所で生きていること自体に価値がある」(宇根 2011: 198) というような主張に端的に見出すことができる。それはアフリカ系アメリカ人の公民権運動の際のスローガンである「Black is Beautiful」のように、「これまでマイナスとされてきた自分の社会的アイデンティティの価値をプラスへと反転させることで自分の価値を取り戻そうとする」ことを目指す、「開き直り」戦略としての「存在証明」(石川 1992: 30) の一環として理解することもできる。

しかし、この問題について、労働という視覚からみるとどうなるだろうか。ジグムント・バウマンは、現代における労働について次のように警告する。

今の自分の職業に愛着を感じ、その職業が自分に要求するものに惚れ込んでしまい、世界における自分の居場所を、遂行される労働や身に付いた技能と同一化することは、自らすすんで面倒に巻き込まれることを意味する。いかなる雇用も本質的に短命であり、いかなる契約も「当座」という、かの条項が含まれているので、こうしたことはあり得そうにもないし、また推奨されるべきことでもない。選ばれた少数者以外の大多数の人々にとって、今日のフレキシブルな労働市場において自らの労働を天職として受け入れることは、大きなリスクを背負うことであり、心理的、感情的な破滅の原因でもある (Bauman 1998=2003: 222-223)。

所得が少なく、なおかつ不安定な仕事で自己の実現を果たし、ワーカホリックとなることが危険であろうことは言をまたない。農業に経済性以外の価値を見出そうという、その動機自体は理解することができる。このことは上述した通り、様々な近代化策を取り入れたところで、それだけで単純に高い経済性を求めることが極めて困難だからである。しかし、農業に経済性以外の価値を見出そうという議論は、あくまでも経済性を担保できないという前提に立つからこそ、「非経済的な意味」で補てんしようという議論なのではなかろうか。筆者は、「開き直り」は、現状の価値に満足できないからこそ、現状の価値を敢えて相対化しようと企画する戦略なのではないかと捉えてお

り、このような議論に強い違和感を覚えている。それは、農業についての労働力の搾取を容認する議論以外の何物でもないと考えからである。今日、巨大な小売企業が農産物市場のプライスリーダーとなっている。商業の基本は安く買って高く売ることにある。農業が、儲からなくても楽しく、豊かで、なおかつやりがいがあるような「非経済的な意味」に満ち溢れる職業であり産業であるとしたら、農業者は農業に従事しているだけで満足なのであり、生産された農産物は安く買い叩いても問題ないという見解の理論的支柱となってしまう危険性を孕んでいるからである。農業の「非経済的な価値」に着目する学術的言説は、農業者をワーカホリックに追い込み、なおかつ全体社会からのいわゆる「やり甲斐搾取」を容認する言説にすり替えられかねないのである。

しかし、近代化が進展し、経済性を追求しようとする産業的な農業においては、農業者は本当に「非経済的な意味」など見出さず、農業を通した利益追求のみに明け暮れているのだろうか。このことに関連して、前稿(野口 2016)では、徳島県のレンコン生産農業の事例から、市場や科学技術、あるいは経済性など、「農業にとっての近代」を与件とした農業においても、農業者が自分なりの意義づけを行っていることを明らかにした。しかし、これらは法人化していない個人事業主である農業者を対象とした研究であった。このことから、必ずしも経済性の追求をより徹底する株式会社の経営者にも直接的に援用できる議論ではなかった。

以上に鑑み、本稿では、近代化や経済性を第一義としない農業(=農)の「非経済的な意味」に着目するのではなく、敢えて高い経済性を追求することを前提とした産業的農業で働く人にとっての「非経済的な意味」について理解することを目指す。具体的に本稿では、農業法人(株式会社)経営者にとっての「非経済的な意味」に迫ることとする。

## 2 研究方法

本研究では、インタビュー調査を主たる調査方法とする。調査対象は、山形県天童市においてネ

ギを主たる生産作物とする農業生産法人ねぎびとカンパニー株式会社代表取締役の清水寅氏<sup>1)</sup>である。インタビュー調査は対話式的非構造化インタビューを行った。研究資料は、インタビュー調査のトランスクリプトを基本とし、この他、調査の際のフィールドノーツの他、同社公式ウェブサイト、清水が自ら執筆したfacebookへの投稿記事などを参照した。清水を事例として選択した理由は、他産業での経営者としての経験の後に、新たに農業界に参入し、飛躍的に経営規模を拡大し続けている経営者だからである。特に、他産業と比較した際の農業の「非経済的な意味」を記述することができることから、本研究の事例として最適であると考えた。

また、調査と解釈の状況を文脈化するために、筆者の立場性と清水との関係性を明らかにしておく。筆者は研究者としての活動のほか、茨城県においてレンコンを主な生産作物とする農業生産法人の取締役を務めている。清水とは、2015年度の農林水産省から株式会社NHKプロモーションへの委託事業<sup>2)</sup>を通して実施された、生産者から消費者に向けたトークイベントの際に知人関係になった。本研究で資料としているトランスクリプトの基になった調査は、2016年1月26日ならびに5月24日に実施した。具体的には、トランスクリプト1-3が1月26日に、4-6が5月24日のインタビューデータに基づいている。また、これ以外に上記のトークイベントなどの機会を利用して5回ほど簡易なインタビュー調査<sup>3)</sup>を実施している。現在は、生産作物の競合がないことから経済的な利害関係もなく、お互いの会社を訪問し合い、経営的な目標や夢を語り合ったり、清水から営業のノウハウの助言を貰ったりするなど、友人関係にある。

本研究は、以上の通り、筆者の立場性と関係性とをテコとした「インフォーマントとの対話」(稲上・石田・八幡・池田2015:5)に基づく調査データへの解釈を通して、「労働している人が編み上げている『生活世界』」(同:9)に迫ることを目指すこととする。

## II 事例の概要について

### 1 清水の個人史

まず、事例の概要について記述しておく。上述した通り、本稿において事例とするのは、山形県天童市でネギを中心とした農業生産法人ねぎびとカンパニー株式会社の代表取締役を務める清水寅である。清水は、1980年、長崎県で大工業を営む両親のもとに生まれる。長崎の高校を卒業後、都内に本社のある商社に入社する。25歳で社内の営業トップとなった業績が認められて27歳で、当時、日本と海外を合わせた従業員数約1600人規模のグループ会社7社(金融、商社、ホテル、ゴルフ場など)の代表取締役となる。

その後、30歳の2月に全ての会社の代表取締役を辞任し、妻の実家のある山形県天童市に移住する。農業大学の新規就農研修に参加し、天童市内のネギ農家に弟子入りする。弟子入りとはほぼ同時に、1haの畑を借り、ネギ栽培と農業経営についての「修業」を兼ねてネギの生産を開始する。2014年9月には、ネギの生産を中心とする農業生産法人ねぎびとカンパニー株式会社を設立。また、ねぎびとカンパニー株式会社とは別に、イベントプロデューサーや農産物加工を担う別法人としてモノヅクリ株式会社を設立する。2016年4月には、ねぎびとカンパニー株式会社の関西支社を立ち上げ、野菜小売業を開始した。2016年現在、清水が代表取締役を務めるねぎびとカンパニー株式会社は、従業員数約30人(臨時雇用含む)、売り上げ約1億円である。

### 2 経営の概要

次に清水の経営方法について記述しておく。

まず、主たる業務である、ネギの生産販売について記述しておく。ネギの栽培面積は約7haである。10a当たりの売り上げは130万円程度<sup>4)</sup>。主な生産作物であるネギの他に、ホウレンソウやカボチャなどを生産している。主力であるネギの2016年現在7月末日の商品ラインナップは、スーパーやデパートを対象とした小売り専用の「寅ちゃんねぎ」を中心に、贈答用の最高級ブランド

である「真の葱」「みんなが愛した寅ちゃんねぎ」、そして「葱ま専用ねぎ」や「すき焼き専用ねぎ」として販売している「究極ねぎ」シリーズである。また、2016年7月からは女性専用の「恋するねぎ」の予約販売を開始した。この他、山形県の蕎麦屋10～50社に対して規格外ネギなどの宅配を行い、さらにネギの加工品として、キムチなどの農産物加工品を全国展開している漬物会社へのアウトソーシングを利用して委託製造販売している。種苗業者から独占販売として種を購入しているハウレンソウは「幻のほうれん草」として、カボチャは「恋するかぼちゃ」としてブランド販売している。現在の経営目標は、「真の葱」などの贈答用商材を中間流通業や小売業を通さずに、自社webなどを利用して販売することで収益を上げることであるといい、様々な広報活動に力を入れている。

それでは次に、広報やイベントプロデュースに関わる側面について記述しておく。最も特徴的なものは、シンガーソングライター kiyoko 氏を「応援する」という目的から、モノヅクリ株式会社の専務取締役として雇用している点である。そして、YBC 山形放送にて毎週水曜の午前11時40分から放送中のラジオ番組「わらっていいべず」について、スポンサー探しを含めた企画段階からプロデュースし、kiyoko 氏と共にメインパーソナリティとして出演している。また、山形名物の芋煮をアレンジした「葱煮」を提案してネギ料理のすそ野を広げる活動を展開し、2015年12月には第21回「天童冬の陣 平成鍋合戦」で鍋将軍（優勝）の座に就く。さらに、スマートフォン用のコミュニケーションツール LINE のスタンプの企画プロデュースを行い、2016年5月に販売を開始する。日常的な業務としては、清水自身がブログ、facebook や Twitter などの SNS へ、レシピや自身の農作業風景についての演出の加わった写真やポエム形式の記事投稿を行っている。これらの記事の一部は、『寅ちゃん笑顔になれる本』として出版されている。このように、新奇性と独創性に富んだ農業経営を行うことを通して、テレビ、新聞や雑誌に取り上げられるという対メディア戦略を行っている。清水は、自身を広告塔とするこ

とでねぎびとカンパニー株式会社のブランディングを図っているのである。

### Ⅲ 7つの企業の会社経営者を辞して就農する

清水が7つのグループ企業の会社経営者を全て辞し、妻の実家のある山形県天童市において新規就農に踏み切った理由は何だったのだろうか。まず、清水が農業に関心を持ったきっかけ自体は、親戚同士の会合の際に妻側の親戚の男性と話した際に「農業は元気がないことから、山形で新規就農をして農業を元気にして貰えはしないだろうか」と持ちかけられたことにあるという<sup>5)</sup>。次のトランスクリプトは、筆者が清水に対し、このことについて改めて尋ねることから開始されたものである<sup>6)</sup>。

#### 【トランスクリプト1】

N 辞めて、こっちで就農しようと思った理由は、前も聞いたんですけど、奥さん側の親戚のおじさんになって。

S そう。要は農業元気がないということ。どっちかっていうと、今まで、だめになった会社に行って良くしてきたっていう癖があるんだよ。7会社持ったけど、1個の会社は金融だった。ホテルもそうやし、売り上げ下がったところに、「清水さん行ってきなさいよ」、〇〇カントリー倶楽部〔仮名／筆者注〕っていうゴルフ場も、「清水さん売り上げ下がってるから、行って売り上げ上げてきなさいよ」って。マンション経営も、うち400何棟あったから、そのマンションが、「空き家が多くなってきたから、行きなさいよ」っていうように。だから悪いところを良くしていくっていう癖が付いてるんだよね。それを、良くしてきた自信があるから、おもしろいわね。だから、農業に元気ないよって言われたときに、「じゃあ、やってやろうかな」って気にはなるよね、当然ね。ほんでやり始めたんだけど。

清水は、「農業に元気がない」と聞いたところから農業への参入を決意したという。その理由は、これまで経営を任されてきた会社の全てが、業績が傾いた会社への出向という形であったからであ

るといふ。そして、その全ての業績を回復させ、そのことにおもしろみを感じるのだという。このことから、「農業に元気がない」ことが、清水が新規就農を決めた理由であるというのである。

しかし、筆者は、このことにあまり納得することができなかった。

#### 【トランスクリプト2】

N 辞めた理由っていうのは、何なんですか。

S 俺、株主じゃなかった。株は全部会長だからね。雇われ社長みたいな。

N だから、そんなに未練はなかったっていうことですかね？

S 全くないよ。やり尽くしたから。尽くすことが大事やから。

N 一念発起したときの理由が、まだ、あんまりよく見えないんですけども。1600人でしたっけ、その規模の社長だった。そこを辞めて、たとえ株主じゃなくて雇われ社長だとしても、社長は社長じゃないですか？代表取締役辞めて。オーナーじゃないと自由に決められる幅が少ないからなんですか？辞めた理由っていうのは？

S いや。株主じゃなくても自分でしたかった。

N 要するに、起業したかったってことなんですかね？

S それだけ。何でもよかったんよ。たまたま農業だったっていうだけの話。その前は、本当は、歌舞伎町で弁当配達したかったの。ホストに。歌舞伎町の世界、ちょっとかじってたから。悩んでるやつらがいっぱいおんのよ。キャバクラの女とか。そんなやつに、ピンクの原チャリで、「今日も頑張れよ」って言って、「お疲れ様」言うて、弁当持ってきたいなって思った。そういう仕事があった。

N やっぱ、起業があったってことなんですかね。

S それだけ。自信あったもん。なんでもいけると。

清水は、7つのグループ企業の会社経営者を退職した理由として、会社の株を保持しておらずオーナー経営者ではなかったこと、全ての企業の経営者として、与えられた業務を全てやりつくしたことを挙げる。しかし、結局のところ、一番の

理由は、起業を目指していたこと自体であるという。そして、農業で起業しようとする以前は、新宿歌舞伎町で「ホスト」や「キャバクラの女」などの「悩んでるやつら」に「お疲れ様」を言いながらの「弁当配達」の会社を立ち上げたかったと語る。「何でもよかった」「たまたま農業だったっていうだけ」と語り、農業に限らず業種は問わなかったというのである。

1990年代以降、農業に都会生活にはない癒やしなどの意味を見出そうとするテレビ番組が盛んに放映されたり、あるいは、いわゆるリーマンショック以降、農業が失業者の雇用先として注目される（秋津2009：5）とともに、「儲かる農業」というような主張が盛んに取り沙汰されたりした（週刊ダイヤモンド編集部2016）。しかし清水は、このような言説を引き受ける形で新規就農をしたのではなく、農業のおかれた社会的・経済的な逆境にこそ魅力があったというのである。ただし、その農業への関心を抱いたきっかけさえも偶然の出来事に起因しているものであり、当初は、農業に対する特別な強い思い入れを持っていたわけではないことが分かる。

## IV ネギに対する思い

### 1 就農1年目の経験

以上を踏まえた上で、清水が1年目の経験からネギの生産にどのような位置づけを行い、なおかつ魅力を感じているのだろうか。このことについて、まず、就農1年目の経験についてみていく。

妻の実家がある山形県天童市において農業で起業することを決意した清水は、味ではなく面積で勝負できる作物としてネギを選択し、同市のネギ農家に弟子入りすることにしたのである。味には主観的な判断が入ることから、面積だけで売り上げが計算可能な作物としてネギが良いのではないかと考えた。清水は、弟子入りと同時に「修業」として1haの畑を借りてネギの生産を開始したが、師匠であるネギ農家や補助金を貰うに当たって相談に行った農業委員会の担当者からは、この面積の栽培を反対され、10a程度から始めること

を勧められることになる。しかし、10aでは到底生活することができないため、あくまでも1haからの「修業」を開始したというのである。

しかし、その前途は多難だった。

【トランスクリプト3】

S 1年目は、本当に大変。こっから骨折してたからな、草取り過ぎて。疲労骨折して。こう取るやろ。

N 手で抜いたんですか、普通に。

S 抜きました。俺らに回ってくる畑って、草ボウボウな畑しかくれないから。雑草の密度がすごい。しかも機械の使い方も分かんねえから、だめやった。手で毎日、朝4時半からずっと。もう二度とできない、あの努力ね。死ぬで。心身が壊れる。終わらないんだもん。ネギできないんだもん。そっからでした。毎日畑で悔し涙。進まんし、草取った所はもう生えてきてるし、どうしていいか分からん。思い返すだけでとんでもないですね。あれあるから今強い。なんかあると思うもん。寝ずにやってたもん。創業のときのあの頑張りをもう一回思い出さないかんで。きついだのへったくれだのって言うてる場合じゃないねん。まじで。1年目が大事だというのは忘れられへん。弟子〔従業員／筆者注〕のばあちゃんと毎日朝4時半からずっと草抜いて、7時になったら飯食って、夜も懐中電灯付けてたまに草取って、もうふらふらや。手がこうしたらこんなある感じ。

N ばんばんで？

S 目つぶったらこんなん。

N ネギを持ったまま寝ちゃうってこと？

S いや、違う。草取るから、こうすっから、〔手が／筆者注〕むくれて、……麻酔したらこうなる感覚あるやん。もう同じ。

温暖湿潤気候地帯にある日本の農業は草との闘いであると言われるが、特に耕作放棄によって遊休化することで荒れ、草の種が大量にこぼれてしまった畑は、濃密に草が発生する。仮に高齢化による耕作放棄から、遊休農地が増加しつつある農村地帯であっても、条件の良い畑は空きが出にくい。不利な条件の畑から耕作を辞めつつ、条件の良い畑は農業を続けられる限界まで耕作され続けることが一般的である。清水が借り上げた土地も

条件の悪い畑や、数年の間、遊休化したような畑ばかりであった。このことから、荒れた土地を畑に戻した初年度は草との闘いそのものだった。

しかし、通常、大規模に経済栽培されている白ネギの雑草処理は、ネギに光合成をさせずに白い部分を作ることと兼ねて、小型のテイラー（耕耘機）を用いて畝に土を寄せるとする方法をとる。清水は手で草を抜き続けたというが、これはネギの経済栽培における除草法としては必ずしも一般的な作業ではないのである。しかし、就農したばかりで耕耘機を使って除草をすることさえ分からなかった清水は、手で草を抜き続けて疲労骨折をしてしまう。清水は、この1年目の経験が大きかったのだと語る。

## 2 ネギ栽培に対する位置づけ

それでは、以上のような1年目の経験を通して、起業するに当たって農業に対して特別の関心や思い入れのなかった清水が、ネギの栽培に対してどのような位置づけを行っているのだろうか。

【トランスクリプト4】

N ネギ作って一番おもしろいのは、結局何なんですか。いろんな作ってるじゃないですか。それはネギとは違うおもしろさがあるのか。カボチャとか、サクランボとか、この間聞いたレモンバジルとか。ああいう他に作ってるものとネギの位置づけの違いとか、ネギの楽しさと別のものなのか、一緒のものなのか？

S 違うよね。これは理屈じゃないな。なんでやるな。好きに理由なんかいらんちゃう？この人、自分の彼女でも奥さんでも、なんで好きなん？理由全部言えるわけじゃないじゃん、人間って。そりゃ、ネギ、大変よ。すぐなんないよ。平等にそろわないよ。うん、作り上げるまでに技術いるよ。でも好きだよな、っていう感覚。

N それは、初めの大変な経験があったからなんですか？

S ああ、かもわからんな。それもあるんちゃう？正直な。

N 全滅させたサクランボとかと、違うんですか。

S 違う。全然違う。もう、したくないもん。カリフラワーも。一生しないよ。

N ジャあ、そういうのとは違うとして、ネギって結局何なんですか。ネギって清水さんの中でどういう存在なんですか。

S 俺にとってってこと？俺にとっちゃ、もう、なんやろな。遊び相手ちゃう？

N 遊び相手？

S おもしろいもん、こいつと遊んどったら。おもしろいわ。

N それがさっきの「よくわかんないけど好きだ」とつながるんですかね。

S つながるな。完全に好きやな。おもしろい。難しいっていうところあるね。技術を伴うっていうのがある。はっきり言って追究したいんだよね。特に太らせるって作業が難しいんやな。

N そこがおもしろいんですか？

S おもしろいわ。

N それは肥料で太らせるんですか。それとも？

S 肥料もある。作り方。タイミング、時期。

N 植える時期？

S 植える時期、もあるし、その管理もあるし、土作りもある。全部がなってないとならない。絶対ならない。そこは言い切れるね。そこは特に注意してる。本当に楽しいよ。ネギはね。

清水にとって、主たる生産作物であるネギの「おもしろさ」は「理屈」ではなく感覚的なものであると言い、それは「彼女」や「奥さん」のことを好きな理由と同じであるという。そして、これまで全滅させてきたようなその他の作物は、「思い付き」であって、全く異なる感覚であるというのである。筆者は、この理由を「毎日畑で悔し涙」を流しながら「毎日朝4時半からずっと草抜き続け、手が「むくれて」「麻酔」してしまったような「感覚」を通り越して「疲労骨折」をしてしまった「1年目」の「あの頑張り」にあるのではないかとして解釈した。

清水によるネギ栽培にとっての最大の特徴の一つは、一般的なネギの生産者からは敬遠されがちな2Lサイズのネギ栽培の収益性の高さを思いついたことである<sup>7)</sup>。市場のネギの規格は、1箱に対してLが45本入り、2Lが30本入りである。Lサイズの規格は2Lに対して1.5倍の本数が必要だが、価格は2Lの1.5倍にはならない。太さ

にかかわらず、ネギ1本当たりにかかる労力は変わらない。このため、スーパーなどの量販店ではLサイズの方が好まれる傾向にあるが、労力に比して利益率が悪いのである。このため、清水の試算では、5haの畑でLと2Lをそれぞれ30年間作り続けた場合、Lサイズを作り続けた場合に対して、2Lサイズを作り続けた方が約12億円分の収益になるという。また、Lサイズを狙った栽培を行うと、Lサイズよりもさらに細く、なおかつ利益率の低いMサイズのネギの比率が増えてしまう。このことから、清水は、2Lサイズのネギ栽培に特化している。

ただし、2Lサイズの太いネギを数多く栽培することは難しいのだという。「平等にそろわない」というのはこのことについての表現である。植える時期や管理方法、肥料などについて「技術を伴う」のだという。一般の生産者は、この作業の難しさを嫌いLサイズのネギに特化している。しかし清水は、その難しい作業が「おもしろいわ」といい、「遊び相手」であるとさえ語る。

## V 産業的農業の「非経済的な意味」

### 1 他産業との比較からみる農業——産業として未確立

次に、以上のようなネギ生産を含めた産業的農業の「非経済的な意味」について解釈する。まず、他業種を経験してきた清水が、他産業と比較した農業にどのような位置づけを行っているのかについてみていく。

【トランスクリプト5】

N 他業種と比べてのおもしろ味っていうのはどこにあるんですか。

S 口で言うの結構難しいんやけど。問題点が多すぎるとこちゃう。

N 悪いとこ直すってことですか？

S 問題点と改善するべきことが山ほどある。全然発展されてない産業に近い。トータルバランスで、技術とか、利益とかいろいろあるやん。トータルバランスがあまりにも偏ってるよね。

N 技術一本やりとか？

S 技術さえも進化できてない。全然。進化できてるのは、作物の中でも、固定されてる。米とか。全ては人をあんまり使わないでいいように、機械化できやすいものと、できにくいものってあるでしょう。作物で。機械化が進みやすいものにどんどんお金がいったるだけ。除草剤で進化してんのは米だけでしょって話。売上げが上がりやすいとか、やってる人間が多いから。病院と一緒にね、いっぱいなる病気に、インフルエンザには国が投資するから伸びていくやん。病気に対しての医者を多くしたりとか研究が多くされる。売れへんもの、〔市場規模が／筆者注〕ちっちゃいもの、ネギはとか、レンコンはとかってものに関しては、完全自動化とかが進んでいかないっていうことがある。農機具屋さんだって、農業の人口減ってんやから、利益出ていかない。国が農業機械に対して補助金どのくらい出してるか分からへんけども、進んでるかっつうとクエスチョンマークやと思うね、俺はね？ 産業としてまだ確立されてないよね。

清水にとっての他業種と比べての魅力、それは「問題点が多すぎる」ところであるという。経営者として金融業、不動産業やホテル業などの業種を経験してきたが、これらの業種と比べて農業が産業として未確立であるという。前述した「悪いところを良くしていくって癖」とも重なるが、この未確立なところに、自分の「できること」を見出している。これまで清水が経験してきた業種は、既に産業として確立されており、清水独自の方法を取り入れる余地が少なかったというのである。

従来、農業の近代化に批判的な研究からは、近代技術によって農業のおもしろさがなくなり、結果的に農業者の主体性が損なわれてしまったとされてきた。ネギ生産農業も、基本的には単作化や機械化が進展しており、農薬を用いる化学的農業でもあり、なおかつ市場化も進展した産業的農業である。しかし、様々な他業種の経営者を経験してきた清水にとっては、現状の農業は「全然発展されてない産業に近い」といい、むしろ主体性を発揮する余地を大幅に見出していることが分かる。グループ企業の役員として歌手を雇用したり、

ラジオのパーソナリティを務めたりといった経営方法を取り入れるところからも、その主体性の余地の幅の広さをうかがい知ることができる。

## 2 作物を作る魅力——無限大の余地

それでは、清水は、作物を栽培すること自体にはどのような意味を見出しているのだろうか。次にこのことについてみていく。

### 【トランスクリプト6】

N ジャあ、作物作ること自体に関しては、楽しいとかないですか。

S あるあるあるあるある！ それが一番楽しいよ！ どんなもの作ってやろうか!?とか、土作りから何から。

N それはどこに楽しみを感じてます？

S いいの作ったら、誇らしいもの。世の中は、誰でもできるを取ったわけですよ。有名牛井屋 A〔仮名／筆者注〕、有名牛井屋 B〔仮名／筆者注〕、なんや、スーパー、スーパーのレジ、何のためにしたか。簡単簡素化、誰でもできるようにしたやろ。誰でもできるじゃなくて、作ったら、誰でもできないようにしたい。俺しか作れないんだって思えば誇らしいやろ。世の中は誰でもできるを取った。俺は逆行したい。俺しかできないを取りたい。誇らしいやん。だから、俺はこんないいネギ作って、うち、寅ちゃんのが一番いいって言われたもんね。時代を、逆行した仕事じゃない？いや、だって、俺らしかできないっつうことになるやん。そういうの求めていきたくない？ねえ？そこに楽しみを感じてるんじゃないかなあ。おもしろくて仕方がない。……茨城の土浦の〇〇会社〔仮名／筆者注〕っていうとこにC先生〔仮名／筆者注〕っていうのがいて、そこに、土のこと勉強したくて行って。それで、その人が言ったんやけど、「一生かかっても答え出ない」と。そこが引かれるわな。ネギを俺70まで作ったって、答え出えへん。それがおもしろい。答えが出ないものを神が作ったものに、テレビは人間が作ったやん？作物っていうのは、神が作ったものに対して、どこまで近づけるか。どこまで分かるか、でも答えが出ないと分かったまま挑戦していくことが、楽しくて楽しくて仕方がないな。絶対無理やもん。

無限大だよ。チャレンジしてもしきれないやろな、この農業は。したいことが全部できないまま、死を迎えるやろな。でもやるだけやれるやろ。でも、それは全体の5%以下。挑戦は、俺は。

N 全体の95%は何してますか？

S いや堅く。5%だけ遊ぶねん。利益が1億あるとしたら500万分はチャレンジ。95%は健全に堅く。俺はね。俺どうしても堅いねんな。

N じゃあ、5%ではどんな？

S 今年から、俺はもう土寄せなんかはしないネギ作りを試してるよ。自然栽培。自然栽培って、無肥料無農薬じゃないよ。触らない。植えたらそのまんま。それのみ。ちょっと手間やけどね。要はさ、こうあるやん。

N 畝ですんね？

S そう。ここに穴あけるやん。ほんで、穴を10センチ、15センチ、20センチとあけるわけやん。で、ズボ、ズボって。で、苗をボトンと穴に落とす。なら、この10センチの間は光があたないから、白根になるでしょ。だって、太ってきたら埋まるんだもん。ここ20センチだと、20センチで太って、こういうものが、ぶわって太くなって、土埋まるじゃん。そしたら白根になるよね。なんにもしない。植えるときにちょっと時間がかかる。マルチ〔土の表面をビニール資材等で覆うこと／筆者注〕したりとか。でもそれだけ。触らない。植えたらおしまい。で、俺が一番のポイントは、酸素の率なんだよね。ネギって酸素好きだから、マルチ張ってると酸素逃げないでしょ。で、水分がここにあるでしょ。で、ネギってこうして植えるんだけど、低いとこに植えるから水が溜まるんだよね。これって、ここに水溜まるのか。これが、物理的にいいじゃんね。俺のイメージ。

清水にとって、作物を栽培することが何よりも楽しいという。その理由は、作物を栽培するという仕事が、自分にしか作ることができないものを作ろうとする作業だからであるという。清水は、作物について、誰が栽培しても全く同じ結果になるような存在として捉えてはいないのである。そして、誰よりも自分自身が栽培したネギが一番であると言われたいのである。清水は、自分だけしかできないものを作るという方向性が現在

の多くの企業が目指している方向性から「逆行」する作業なのだ捉えている。このことから、清水は、自身のネギ栽培の姿勢を通して、自身を「アーティスト」であると表現している。清水が、作物を育てるという作業を、単純に作物が育つことを待っているのではなく、自分の考え方に基づいて作物を「創る」作業であると捉えているのである<sup>8)</sup>。以上から、清水にとって、作物を栽培するという作業が、計算可能性や効率性を徹底していこうとする全体社会の大きな趨勢とは、対極の位置にある作業であると理解することができる。さらに、その自分の考え方に基づいた作物栽培の極致へは、自分の人生の全てをかけても到達できないのではないかと捉えている。作物を栽培するという事は、チャレンジを許容する無限大の余地を含んでいるというのである。しかし、だからといって清水が企業経営上に必要な合理性の追求を放棄し、やみくもなチャレンジを行っているわけではない。チャレンジは全体の5%に過ぎず、全体の95%は堅い経営なのだという。そして、5%のチャレンジの方向性についても、経済性を追求するための方向性に向けられていることは明らかである。さらに、そのような自分にしかできないチャレンジについても、上述した通り、facebookやTwitterなどのSNSを利用した情報発信によって、企業価値向上のためのブランディング戦略に用いているのである。

以上から、清水のチャレンジを許容する余地が、会社経営の延長線上にあることが分かる。清水にとっての農業の「非経済的な意味」、すなわちチャレンジを許容する無限大の余地は、経済性の追求とは異なる方向の中に存在しているのではなく、あくまでも経済性<sup>9)</sup>を追求しようという経営上の目的の延長線上にあるのである。

## VI おわりに

最後に、これまでの内容を通して明らかになったことについてのまとめを行っておく。

Iでは、先行研究の検討を踏まえて、本稿の課題提示を行った。従来、農村社会学、環境社会学や民俗学における近代化を経た産業的農業は極め

て否定的な意味で取り扱われている。一方で、伝統的な農業や経済性を目的としない農業、すなわち「農」の「非経済的な意味」が肯定的に論じられている。このような先行研究を踏まえ、本稿では経済性の追求を前提とした農業生産法人の経営者の持つ産業的農業の「非経済的な意味」について理解するという課題を立てた。

Ⅱでは、本稿の事例として示した清水についての概要として、清水の個人史とねぎびとカンパニー株式会社の経営概要について記述した。個人史ではⅢの前段として、7つのグループ企業経営者から新規就農した経緯に触れ、経営の概要においては歌手をグループ企業の役員として雇用するとともに、ラジオのパーソナリティを行ったりするなど、新奇性と独創性に富む経営方法について記述した。Ⅲでは、7つの会社のグループ企業経営者から新規就農にいたる経緯について記述した。それは必ずしも、当初からの農業への強い関心に基づくものではなく、起業して独立したいという目標の中で出会った、些細なきっかけからの選択肢の一つでしかなかった。そしてそのきっかけは、農業が困難な状況に置かれているというものであり、これまでの経営者としての経験から、その困難な状況を解決すること目指して就農することになったのである。

ⅣならびにⅤでは、清水のネギに対する思いと、ネギ生産を含めた産業的農業の「非経済的な意味」に迫った。まず、Ⅳでは、清水の捉えるネギ栽培の魅力について、ネギ栽培を開始した1年目の経験と、ネギに対する位置づけという観点から理解することを努めた。Ⅲで記述したように、農業に対する強い思い入れは持たなかった清水であるが、就農して1年目の困難な経験から、ネギに対する強い思い入れを形成していく。続くⅤでは、Ⅳで取り扱ったネギ栽培を含めた産業的農業の「非経済的な意味」について記述した。様々な他業種の経営者を経験してきた清水にとっての農業の魅力は、産業的に未確立なところにあたった。この点が、様々な経営手法を取り入れる余地となっている。そして作物を栽培するということは、経済性を追求しようという経営上の目的の延長線上にありながらも、チャレンジを許容する無限大

の余地であることを明らかにした。

以上を総括する。従来、農業の近代化に対しては批判的な見地からの研究が数多くなされており、農業者の主体性や自律性を奪う大きな要因として描かれてきた。一方で、近代化とは一線を画した農業(=農)については、様々な「非経済的な意味」が取り上げられ、肯定的に描かれてきた。しかし、本稿で描いてきたように、産業的農業も相対的には必ずしも確立されつくした産業なのではなく、大幅な主体性の余地を担保している産業であることが分かった。同時に、作物を生産することにはチャレンジを許容する無限大の余地を含んでいる。しかし、そのようなチャレンジは、あくまでも経営の延長上にあるチャレンジなのである。すなわち、農業を職業として選ぶ農業法人経営者にとって、近代化を経た産業的農業の「非経済的な意味」は、経済性を担保しながらも、なおかつ無限大に広がるチャレンジの余地であると結論づける。

なお、本稿は農業法人経営者についての分析であったため、農業法人に従業員として働く雇用労働者については取り上げることができなかった。このことについては今後の課題としたい。

#### 謝辞

本稿の最後に、貴重な時間を割いて、本稿の執筆に全面的にご協力いただいた、ねぎびとカンパニー株式会社代表取締役の清水寅氏にお礼を申し上げます。

- 1) 本人の許可を取り、全て実名で記述する。以降の表記については敬称を略する。
- 2) 平成27年度日本の食魅力再発見・利用促進事業委託事業(生産現場の情報活用促進事業)。具体的には生産者から消費者への情報発信である。
- 3) 具体的には、2015年10月28日、11月15日、2016年2月7日、2月11日、3月2日である。
- 4) JAを経由したネギの一般的な10a当たりの売り上げは60万円程度であるという。
- 5) 2015年10月28日、品川で開催された消費者向けのトークショーと一緒に登壇した際に聴取した。
- 6) 以降の全てのトランスクリプトに示されている記号Sが清水、記号Nが筆者である。
- 7) 2016年1月26日のインタビューの際に聴取した。
- 8) この考え方を最初に聴取したのは、2015年10月28日に開催されたトークショーの関係者による打ち合わせ中である。
- 9) しかし、それは、「吉本〔興業／筆者注〕専用ネギとか完全に思い付きやろ。全て思い付きだから、俺。何が当たるかなんて、世の申わからへんで。思い付いた感覚でいくしかないやろ」(2016年5月24日聴取)というように、合理性や計

算可能性を追求する（経済学的な）経済性ではなく、「思い付いた感覚」に基づく経済性（金儲けは、論理的な計算づくだけでなく、カンこそがものをいうという清水氏の体験的な常識）なのであり、遊びの要素を多分に含んでいる。

#### 参考文献

- 秋津元輝 (2009) 「農への多様化する参入パターンと支援」『農業と経済』75 (10) : 9-14.
- 安室知 (2008) 「『遊び仕事』としての農——前菜畑と市民農園の類似性」『農業および園芸』83 (1) : 127-132.
- ・古家晴美・石垣悟 (2009) 『日本の民俗(4) 食と農』吉川弘文館.
- 池上甲一 (2001) 「日本農村の『二〇世紀システム』——村研究再発見のための試論」『日本農村の「20世紀システム」——生産力主義を超えて』農山漁村文化協会, 7-53.
- 石川准 (1992) 『アイデンティティ・ゲーム——存在証明の社会学』新評論.
- 稲上毅・石田光男・八幡成美・池田心豪 (2015) 「座談会 労働調査で大切なこと——これからの質的調査に向けて」『日本労働研究雑誌』665 : 5-21.
- 宇根豊 (2011) 「百姓学宣言——経済を中心にした生き方」農山漁村文化協会.
- (2014) 『農本主義が未来を耕す——自然に生きる人間の原理』現代書館.
- 大野和興 (2004) 『日本の農業を考える』岩波書店.
- 週刊ダイヤモンド編集部 (2016) 「特集 儲かる農業——攻めに転じる大チャンス」『週刊ダイヤモンド』104 (6) : 26-69.
- 徳野貞雄 (2001) 「農業における環境破壊と環境創造」鳥越皓之編『講座 環境社会学 第三巻 自然環境と環境文化』有斐閣.
- (2011) 『生活農業論——現代日本のヒトと「食と農」

学文社.

- 日本村落研究会編 (2001) 『日本農村の「二〇世紀システム」——生産力主義を超えて』農山漁村文化協会.
- 野口憲一 (2016) 「〈産業としての農業〉を営むという実践を理解する——徳島県におけるレンコン生産農業の事例から」『日本民俗学』285 : 57-77.
- 藤村美穂 (2008) 「山に火をいれること」山泰幸・川田牧人・古川彰編『環境民俗学——新しいフィールド学へ』昭和堂, 58-79.
- 船戸修一 (2004) 「有機農業と生産者の観察力——成田・三里塚『循環農場』の事例から」『年報社会学論集』17 : 132-143.
- 榊渥俊子 (2002) 「有機農業運動が拓く新しい社会の〈システム〉」榊渥俊子・松村和則編『食・農・からだの社会学 シリーズ環境社会学五』新曜社, 1-21.
- (2008) 『有機農業運動と〈提携〉のネットワーク』新曜社.
- Bauman, Zygmunt (1998) *Work, Consumerism and the New Poor*. Open University Press. (=2003, 渋谷望訳「労働倫理から消費の美学へ——新たな貧困とアイデンティティのゆくえ」, 山之内靖・酒井直樹編『グローバリゼーション・スタディーズ1 総力戦体制からグローバリゼーションへ』平凡社, 203-234.)

のぐち・けんいち 日本大学文理学部若手特別研究員。株式会社野口農園取締役（採用・企画プロデュース担当）。最近の主な著作に「〈産業としての農業〉を営むという実践を理解する——徳島県におけるレンコン生産農業の事例から」『日本民俗学』(2016) 285 : 57-77。民俗学・農業社会学専攻。